

1999年度

### I.総括

はじめに：現在、大阪医科大学 大学院 医学研究科の共同研究に関する評価はシステム化されていない。そこで、今後の当医学研究科における共同研究の踏台とするべく本報告書を作成する。

現在の状況：大阪医科大学 大学院 医学研究科 微生物学講座は形態系に属し、電子顕微鏡を主たる手法として微生物学研究を行う点で、微生物学・感染制御学分野では本邦でも貴重な研究機関として注目されている。1999年中に得られた共同研究成果の5分の3は形態学的研究を担当したもので、共同研究先も全国に広がっている。

本年の成果：本年は学外9機関との共同研究を行い、その成果は5編の学術論文として、掲載された。うち、当医学研究科が主導的に行った研究の論文は2編である。本年の成果の特徴は細菌学研究に関する学術論文が3編と半数以上を占めることである。1987年以前の当講座はウイルス学研究に重点をおいていたが、社会の要請に従い感染制御学に重点を置き、微生物を対象にした研究に移行した。また、効率のよい研究を求められたことから、研究は以前と同様に共同研究形態をとっている。インパクト・ファクター(1999年版)の合計は16.885であった。

本年の評価：昨年の研究成果をもとにした形態学的研究においてウイルス学分野のトップ雑誌である *Journal of Virology* に当講座主導の論文が掲載されたことは評価できる。しかし、インパクト・ファクターの合計16.885は、医学・生物学分野の一流雑誌の一遍分相当である。関係した当研究科講座の大学院教員数からみて、論文数が少なく、今後論文数を増やす努力が必要である。また、本年は共同研究以外の研究結果はなく、本学独自あるいは当講座独自の研究をもとにした共同研究を展開し、医療に貢献するような実学研究を行う必要がある。また、研究内容については、微生物学と免疫学が不可分な関係を保ちつつ、医学・生物学に寄与してきた歴史と感染制御学の発展に寄与する可能性に鑑み、何らかの形で免疫学に関連した分野の研究を進める必要があるものと考えられる。

来年の計画：2000年には関係する当研究科講座の助教授が JICA 長期専門家として派遣される。そこで、関係講座から国際雑誌に受理あるいは掲載される論文数を増やすことを目標にする。また、海外との共同研究を行うことによって、外国人とのコミュニケーションを円滑にする。他方では、学内の共同研究を積極的に行い、当大学院医学研究科の活性化にも努力する。